

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13190

研究課題名（和文）日本の大学における「内なる国際化」発展に向けての基礎研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study Towards the Development of "Internationalization at Home" in Japanese Universities

研究代表者

水松 巳奈（Mizumatsu, Mina）

東洋大学・国際教育センター・講師

研究者番号：30726211

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の大学における内なる国際化の効果に影響を与える組織的及び人的要因を明らかにするために、大学の4つのステークホルダーグループ（大学執行部、教員、国内学生、外国人留学生）に対するインタビュー調査を実施した。その結果、大学での国際化推進に対する政府からの経済的支援により、グローバルな教育・研究環境を整備・維持する中で、大学の文化資本や社会関係資本に変容をもたらし、短期的・長期的に大学に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、その結果、教職員や学生の多様化が進むなど、大学の組織風土に肯定的な影響を及ぼし、このことが大学の評価を高めてきたことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本の大学における国際化推進に影響を与える組織的及び人的要因を明らかにした。4つのステークホルダーグループへのインタビューを通じ、立場の異なる視点からの知見を得た。ブルデューの資本論を分析枠組みとして、文化資本、社会関係資本、経済資本が大学の国際化にどのように影響するかを具体的に示した。また、教育環境の国際化が学生の異文化間能力等の向上に寄与すること、国内学生及び外国人留学生に対する経済的支援の重要性、国際共修や国際寮の活用が交流促進に有効であることなどを示した。本研究は、具体的な提言を通じて学術的な理解を深め、大学の国際化推進の文脈において学術的・社会的な意義を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：This study conducted interviews with four stakeholder groups at a Japanese university: university executives, faculty members, domestic students, and international students. The goal was to elucidate the organizational and human factors influencing the effects of "Internationalization at Home." The findings revealed that government financial support for promoting internationalization has brought about changes in the university's cultural and social capital, affecting the institution in both the short and long term as it strives to establish and maintain a global educational and research environment. Furthermore, the diversification of faculty members and students has positively impacted the university's organizational culture, suggesting that this has contributed to enhancing the university's reputation.

研究分野：比較国際教育、異文化間教育

キーワード：大学の国際化 内なる国際化 海外留学

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化する現代社会において、世界の高等教育も大きな変革を遂げている。1990年代以降、大学の重要な役割は、世界で活躍できるグローバル人材を育成することとされており (Deardorff 2015)、日本の大学もその流れに沿って教育の国際化を推進してきた。

日本の高等教育では、これまで「教育の国際化」の中でも特に「海外留学」に焦点を置いてきた。しかし、2000年代以降、欧米では海外留学だけでなく、国内で適切な環境を整えることでグローバル人材を育成するアプローチが模索されてきた。日本では2004年をピークに国内学生の海外留学数が減少しており、留学期間も短期化の傾向にある。2017年時点で日本の大学生の海外留学者数は大学生全体の3.4%にしか満たず、残りの96.6%の学生はモビリティの恩恵を受けていない状況にある。また、日本学生支援機構(2017)の調査によると、2015年度時点で、全体の70%以上の海外留学経験者の留学期間は1か月から3か月未満であった。

近年、日本でも海外留学者数の減少や短期化が進む中、「内なる国際化(Internationalization at Home)」(Nilsson 1999)が注目され、国内キャンパスや地域社会を学習リソースとして活用する取り組みが増えている。その結果、学生が海外留学に行かなくても、国内で適切な環境を整えることで大学生をグローバル人材として育成する方法が模索されている。

日本の大学における教育の国際化に関する研究は、その有用性について主に政策的な立場からの分析や、教室やアクティビティ単位での研究が行われている。しかし、内なる国際化の影響を受けるステークホルダーに焦点を当て、その効果を包括的に検討した研究は限られている。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、「A大学での国際化推進の效果に影響を与える組織的および人的要因を明らかにすることを目的として、A大学の4つのステークホルダーグループ(大学執行部、教員、国内学生、外国人留学生)へのインタビュー調査を行った。本研究を通じて、日本の大学における教育環境の国際化推進に関連する要因を理解し、それが大学の機能や文化、個々のステークホルダーの行動にどのように影響を与えているかを把握した。

## 3. 研究の方法

本研究では、日本国内の大学(A大学)における単一事例研究を実施した。具体的な調査方法は以下の通りである。

- (1) 文献調査および対象大学の一次資料や二次資料の収集
- (2) ステークホルダーグループへの半構造化インタビューの実施・分析

当初の計画では、複数の大学における事例研究を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、複数の大学のステークホルダーに対する包括的な調査の許可を得ることが困難であった。そのため、調査対象を1校に絞り、単一事例研究とし、より深く詳細に、対象大学の状況について把握することに努めた。

## 4. 研究成果

各ステークホルダーグループへのインタビュー調査の主な分析結果は以下の通りである。分析枠組みには、ブルデュー(1986)の資本論を援用し、分析を行った。

### (1) 国際化推進の效果に影響を与えている組織的要因

まず、本研究で調査対象としたA大学の全ステークホルダーグループの共通点として、A大

学の国際化推進により、世界トップレベルの教育研究機関として国内外で認知されるようになったことに誇りを感じていた。ただし、国内学生は、入学時点での大学の偏差値を重要視する傾向が見られ、国際な評価以上に、国内での評価により関心があることが浮き彫りとなった。これは日本で入試システムに関連しているものだと考えられる。また、国内学生、外国人留学生問わず、A大学への誇りは大学入学後に感じるようになっていたことも分かった。多くの学生が、当初はA大学への入学の意向はなかったが、一度入学すると徐々にその価値を認識し、A大学に対する誇りを持つようになっていた。この認識の変化には、多くの場合、世界大学ランキングでの順位が影響していることも明らかになった。

大学執行部と教員は、文化的および社会的資本としてA大学の立地を国際化の重要な要因として捉えていた。A大学が位置する地方都市は、その地域の国際拠点として発展してきた。A大学はその立地を生かし、多様なバックグラウンドを持つ学生を誘致するための学術的な交流などに積極的に取り組むことで、独自の付加価値を確立してきた。一見デメリットだと考えられる立地を逆手に取り、国際化推進の1つの特色として地域連携を積極的に行ってきたことを、特に大学執行部と教員が高く評価していることも分かった。

また、国内学生と外国人留学生の双方のグループが、A大学の教育環境を高く評価しており、これが国際化の成功に貢献していると考えていた。多くの学生は国際共修授業での良い経験が、自らの、そして他の学生の異文化間能力の向上に役立っていると考えていた。外国人留学生の多くが研究環境全体を高く評価していた一方で、一部の外国人留学生は研究室の教員の異文化間能力の低さを指摘した。また、国内学生と外国人留学生の双方のグループとも、大学や政府からの経済的支援は国際化の重要な要素だと認識していた。国内学生は海外留学のための財政的支援、外国人留学生は大学授業料に関する財政的支援を高く評価し、国際化に大きな影響を与えていると考えていた。

## (2) 国際化推進の効果に影響を与えている人的要因

A大学の執行部および教員は、同大学において大学経営や国際教育における豊富な経験を持つ教(職)員が国際化推進に努めていることを認識していた。しかし、国際化に取り組む多くの教(職)員の任期制での雇用であることに関して懸念を抱いていた。優秀な人材の流出を防ぐために、より安定した環境下で継続的に国際化を推進できる体制の構築が求められているとの指摘があった。

また、教員と国内学生双方のグループが、国際化に従事する教職員や学生の異文化間能力を比較的高く評価していた。一方で、国際化に従事していない教職員や学生は、異文化間能力が低い傾向にあることが指摘されていた。調査対象者の多くが、半数以上の学生や教員が国際化に関連する活動に興味を示していないのではないかと認識があった。この点から、国際化に関わるステークホルダーとそうでないステークホルダーの間に、国際化への意識や異文化間能力に格差があることが確認された。

さらに、国内学生と外国人留学生の両グループが、異なる文化背景を持つ学生との関わりや交友関係について肯定的に捉えていることが分かった。ただし、大学国際化の推進により、国内学生と外国人留学生の交流機会は増えたと認識している一方で、キャンパス内外で異文化交流に積極的に関与している個人は限られていることを指摘した。両学生グループが、大学側がより多くの国際共修授業や交流の機会を提供することで、今以上に関わりが増えることを期待していた。学生らはまた、国際学生寮が日常生活の中で異文化交流する機会を提供している点で、重要な役割を果たしていることを認識していた。

このように、A 大学がここまで築いてきた教育・研究環境を維持するためには、今後も継続的に経済資本を投入し続ける必要があり、これには綿密な計画が求められる。経済資本の確保と投入が結果として大学の文化資本や社会関係資本に新たな価値をもたらし、大学が目指す国際化の方向性に沿って進展してきたことが明らかになったことは、本研究の大きな成果の一つであると言える。

本研究では、A 大学の単一事例研究から得られた知見を提示した。しかしながら、大学の国際化はその規模や立地によって異なるため、今後は A 大学と類似した特性を有する大学だけでなく、異なる特性を有する大学における状況も調査し、今回の事例との比較を通じて、新たな知見を得たいと考えている。特に、コロナ禍を経て大学の国際化環境が大きく変化していると予想されるため、その影響に関する調査を実施していくことも今後の課題である。また、ステークホルダーの異文化理解能力やグローバルコンピテンシーの変容について、よりミクロな視点での調査を今後進める予定である。

#### < 主な参考文献 >

- Bourdieu, P. (1986). The forms of capital. In Richardson, J. (Ed), *Handbook of theory and research for the sociology of education* (p. 241–258). Westport, CT: Greenwood.
- Deardorff, D.K. (2015). *Demystifying Outcomes Assessment for International Educators: A Practical Approach* (1st ed.). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781003444060>
- Nilsson, B. (1999). *Internationalization at home: Theory and praxis*. Amsterdam, Netherlands: EAIE Forum.
- 日本学生支援機構 (2017)「平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査結果」.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 水松 巳奈	4. 巻 2
2. 論文標題 大学での留学促進に向けた一考察 留学準備講座での大学生の留学に関わる価値観と行動特性に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東洋大学国際教育センター紀要 = Bulletin of the Toyo University Center for Global Education and Exchange	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34428/0002000380	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 水松 巳奈	4. 巻 25
2. 論文標題 国内キャンパスにおける大学生の異文化コンピテンシーの特性とその背景にある要因に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 異文化コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水松 巳奈	4. 巻 1
2. 論文標題 客観的評価に基づいて検証した大学生のグローバル・コンピテンスの変容と特性から見えた課題と可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際教育センター紀要 = Bulletin of the Center for Global Education and Exchange	6. 最初と最後の頁 27 ~ 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34428/00013992	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水松 巳奈・山中葵	4. 巻 6
2. 論文標題 個人の社会化が異文化理解を学ぶ学生に与える影響 - 日米の大学の授業におけるケーススタディ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要	6. 最初と最後の頁 9 - 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 水松巳奈	4. 巻 5
2. 論文標題 入学前教育としての海外研修における学習成果の検証 - 参加者の体験レポートと追跡アンケート調査の比較から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 213-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Internationalization at Home in Japanese Higher Education
3. 学会等名 AoFE Research Centers Launching Symposium, Xi'an Jiaotong-Liverpool University (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 水松巳奈
2. 発表標題 コロナ禍における大学生の異文化コンピテンスの客観的評価に関する考察
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会 第36回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 末松和子, 北出慶子, 村田晶子, 尾中夏美, 黒田千晴, 水松巳奈, 渡部 留美
2. 発表標題 「国際共修」で新時代を切り開こう
3. 学会等名 Summer Institute on International Education, Japan (SIIEJ)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水松巳奈
2. 発表標題 大学のステークホルダーは国際化推進をどう捉えているのか？ - A大学を事例として -
3. 学会等名 多文化関係学会 第19回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Teaching Intercultural Understandings to Multicultural Class in Hybrid Learning Environment: Utilizing a Social Performance Optimization Tool to Maximize Students' Social Presence in Class
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会 第35回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Internationalization of Japanese Higher Education: its history and the current trends
3. 学会等名 Xi'an Jiaotong-Liverpool University (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水松巳奈
2. 発表標題 オンラインでもできる！「国際共修」ワークショップ
3. 学会等名 国際教育夏季研究大会 2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mina Mizumatsu
2. 発表標題 Enhancing On-Campus Global Learning: The Case of a Japanese University
3. 学会等名 NAFSA 2019 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水松巳奈
2. 発表標題 異なる学生グループ間の「国際化」の定義の比較に見るこれからの大学国際化の可能性 - 国立大学における事例から -
3. 学会等名 異文化間教育学会 第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 末松和子・北出慶子・米澤由香子・水松巳奈
2. 発表標題 カリキュラムの国際化と国際共修について実践しながら学ぶ
3. 学会等名 国際教育夏季研究大会2019 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mizumatsu, M, Wang, N, Heiser, R
2. 発表標題 Introducing SPOT to Cross-cultural Class at a Japanese University: Enriching the Student Learning Experience
3. 学会等名 2019 AECT International Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Mizumatsu, M.
2. 発表標題 A Case Study of Internationalization at Home at a Japanese University
3. 学会等名 Asia-Pacific Association for International Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomita, M. & Mizumatsu, M.
2. 発表標題 Enhancing Global Citizenship through Intercultural Learning on Campus and Abroad
3. 学会等名 Asia-Pacific Association for International Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 328
3. 書名 国際共修－文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ	

1. 著者名 富田真紀・水松巳奈	4. 発行年 2018年
2. 出版社 IBCパブリッシング	5. 総ページ数 8
3. 書名 グローバル人材育成教育の挑戦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------